

大豆の種蒔き

令和3（2021）年6月21日（月）、いただきますの森準備会のメンバー6人とボランティア6名（うちボランティアセンターから4名）が参加して、いただきますの森の畑を耕して、大豆の種を蒔き、給食の残りくずと木材を混ぜて作られた堆肥をマルチした畝を作りました。

いただきますの森史上初の畑作業は12名という大勢の参加者にお集まりいただき、すべり出し好調です。いつもこれくらい参加者が確保できたら作業はとてもスムーズですね。



この日は、前々日に降った雨のおかげで、土に適度に湿り気が残る、種蒔きには上々のコンディションでした。本当はこの前々日が予定していた作業日でしたが、かなりの雨が降ったため、やむを得ず延期して今日の作業となりました。

朝のうちは曇りがちでしたが、天气に恵まれ、時折、強まる太陽の光と夏を思わせる“熱気”を浴びての作業は、暑さに体が慣れていないせいもあって、なかなか大変でしたが、みんな、楽しそう。



給食残渣を使用した堆肥からは、湯気が上がっていました。先日の雨で湿ったことで発酵が進み、熱を発していると思われます。



ただの野原にしか見えなかった場所が、だんだんと畑らしくなってくると作業はさらにスピードアップします。

10日ほどすれば大豆の芽が出て、すくすく生長してくれるでしょう。



この写真は、大豆の種をいただいてきた時の写真ですが、赤く色が付けられている粒々が大豆です。

今回、この大豆を畑に蒔きました。

この赤い色は、カラスやハトなどから大豆を守り、防腐の役割も持っている薬剤だそうです。

少しは鳥たちにおすそ分けしてあげても良いのですが、一粒一粒、丁寧に蒔きましたから出来るだけ多く育ててほしいので、仕方ありません。

ただし、来年以降は収穫した大豆をそのまま種として使いますので赤い色はありません。鳥たちに少し横取りされるかもしれませんが、それをご愛敬。大らかな気持ちでいきましょう。

この大豆の名前は、「津久井在来大豆」といい、神奈川県相模原市緑区の千木良地区というところで古くから栽培されていた大豆です。この地域が昔、「津久井」と呼ばれていたことからこの名前が付けられたそうです。

一時期は輸入大豆により栽培面積が減ってしまいましたが、地域の在来大豆を守ろうという地域の人たちの熱心な取り組みが行われ、現在では相模原市内各所で栽培されており、少しずつ生産量は増えてきましたが、「幻の大豆」とも呼ばれているそうです（さがみはら農産物ブランド協議会公式ホームページ「さがみはらのめぐみ」より一部引用しました。）。

そんな大切な「幻の大豆」を縁あって、相模原市緑区根小屋で農家を営む石井好一さんから、分けていただく機会に恵まれ、気前よく沢山の種蒔き用大豆をいただくことができました。

ここで改めて、お礼を言わせていただきます。相模原市の石井さん、間を取り持ってくださいました谷口さん、その他関係者の皆さん、本当にありがとうございました。大切に育ててまいります。

さて、津久井在来大豆は、いわゆる固定種（「こていしゅ」と読みます。）と言われる種になります。

親となる作物から取れた種を蒔いたら、また親と同じ味や形の大豆が取れる、つまり、固定された種ということです。

固定種は、代々自家採種が可能なので、循環型の持続可能な農業に向いているそうですから、まさに私たちが目指す、環境負荷の少ない持続可能な「いただきますの森」にぴったりの大豆ってことですね。

この津久井在来大豆をいただきますの森で継続して育て、種をとり、少しずつ、広げていくことができれば、谷保の城山が、津久井在来大豆の第二の故郷になる日が来るかもしれないなあ…なんて妄想するだけでワクワクします。

そんな夢をボランティアの皆さんと共有しつつ、森づくりを進めていこうと思います。

(文責：環境政策課花と緑と水の係 長南)